

# 静内ケアセンターだより 8月臨時号

認知症高齢者GH・ケア付き高齢者住宅・デイサービス・訪問介護・患者輸送・文責下川孝志

\*\*\*\*\*

## ”からだに気をつけて がんばれよ”

今朝、フジテレビで在宅で看取った取材が報道されていたが、介護している息子にお母さんが最期にかけた言葉である。平穩死の講演会の長尾和宏先生の様子や訪問診療の様子。介護者と本人が「つどい場さくらちゃん」へ出向いての、丸ちゃんこと丸尾多重子さんとの様子が紹介されていた。

今後、特養や病院に入れない「死に場所難民」が47万人でるといふ。親を在宅で看取りたいと思っても、医療と介護の支えがなくては出来ない現実がある。特に医療者側が長尾先生のように積極的に訪問診療をし、余分な治療はしない「平穩死」の実践者はまだまだ少ない。

元気な内から「最期はどういう死に方をしたいか」を親子で話し合っておければいい。

逝去する2日前のAさんの様子もあった。「兄弟で最期を在宅で看たい。医療も介護保険制度も有効に使っているので「自分達だけが・・・はない」と話していた。

「在宅で看ているが、医療が必要になれば入院させているし・・・」息子さん「でも病院へ行けば2日もすると帰りたいと言うんだよね。どうして？」お母さん曰く「病院は意地悪」ときた。(本人の望む治療をしてくれないかな・・・)

こうしてAさんは在宅で家族に「平穩死」で看取られた。

「介護する側がちゃんと食事しなくては駄目よ」と「つどい場さくらちゃん」に行くと相談を受け入れながら、丸ちゃんは料理をつくってくれる。私が行った時も、電話相談をしながら料理をつくっていた。これが実に美味しいのである。

我が山田クリニックの富部 勝先生も「平穩死」の実践者である。本人や家族が選択すれば、その希望を満たす医療者・介護者でありたい。

\*丸ちゃんや長尾先生には新ひだか町にも来ていただいて講演会を持ったし、私も西宮に行つてコラボすることもあるが、医療・介護の問題は、北も南も、大都市も地方も共通課題である。「人がどう生きるか、どう死ぬか」だからである。

\*\*\*\*\*  
今、「つどい場さくらちゃん」を真似て、誰もが集まれる居場所をつくっている(仮称、地域交流センター)。介護している人(家族)、悩んでいる介護職員、相談受け入れ、ボランティアデイ、ナイトデイ、ショートステイ、研修から葬儀まで・・・地域の人への開放等。色々な利用が考えられる。60歳以上の定年後の人の活躍の場にもしたい。